

パンデミックとキリスト教

同志社大学 神学部・小原克博

1. はじめに——COVID-19 とキリスト教

1) 9.11 に想う（自己紹介を兼ねて）——拡散する恐怖の結末と今後

—神教研究の始まり（小原 2018a）

2) 教会における集団感染——信教の自由と公益の衝突

3) 陰謀論——カルト、進化論論争との類比

- ・聖書にも「陰謀」は散見される。パウロは陰謀をたくらむ者たちと戦った（使徒 20:19）。
- ・ワクチン否定論の事例

◎米ワクチン接種で最も抵抗強い白人福音派

【CJC、2021年8月2日】米国で新型コロナウイルスのワクチン接種運動が始まって半年以上が経過したが、福音派のキリスト教徒は他の主要宗教グループよりもワクチン接種に抵抗を示している。経済専門メディア「ウォールストリート・ジャーナル」が7月29日報じた。

「宗教と国民生活との接点」を研究する超党派団体「公共宗教研究所」(PRRI)と、宗教間の協力を目的とした非営利団体「インターフェイス・ユース・コア」が行った調査によると、6月の調査では白人福音派の約24%がワクチンを接種するつもりはないと答えた。3月は26%だった。

さまざまな人種の福音主義者は米国人口の約4分の1を占めている。保健当局者は、彼らにワクチン接種を受けるよう説得することが、最近のコロナ感染者増の原因となっている変異ウイルス「デルタ株」の拡散を遅らせるために重要、と述べている。

4) より大きな背景——地球環境の有限性と人類

COVID-19 と集中豪雨等の気候変動の関係

2. 歴史を振り返る

1) 因果を説明しようとする根源的欲求——物語、神話、そして科学

人間は自分が何者かを人間同士の関係においてだけでなく、世界や宇宙との関係の中で考えてきた。大脳皮質が他の動物と比べ肥大化した人類は、自分の行為がどのような帰結をもたらすのか、あるいは、目の前で起きている現象の原因は何なのかを推測する高度な力を得た。それゆえ、太古の昔から、人間には自分の世界認識や経験を納得させてくれる「物語」（理論と言い替えてもよい）が不可欠であった（山極・小原 2019）。そのための重要な役割を古代世界においては神話が担っていたのであり、現代では科学が同様の役割を果たしている。新型コロナウイルスの拡大によって多くの犠牲者が出たと知ると、私たち

は恐れ、心を痛めるが、疫病を神罰やたたりと考えざるを得なかった時代とは異なり、現代人はその感染メカニズムを科学的に理解し、より効果的に対応することができる。

歴史の長きにわたって、パンデミックは外因的もの（神罰等）と見なされてきた。それに対し、現在のパンデミックは内因的なものであり、人間の活動に関係している。「神的だったものは人間的なものとなった」（ナンシー 2011、7 頁）。

2) 聖書における因果への問い、応答

➤ ヘブライ語聖書（旧約聖書）

- ・戦争・飢饉・疫病（疫病は神がもたらすものと考えられていた）
- ・ヨブ記（ヨブはサタンの手により「ひどい皮膚病」にかかる） → 神義論

➤ 新約聖書

- ・善因善果・悪因悪果（因果応報）の論理（→自己責任論）の否定

また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。（ルカ 13:4-5）

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。（ヨハネ 9:1-3）

人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。（マタイ 7:1-5）

・「最適化」のモラトリアム

イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った、『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』 主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った、『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』（マタイ 13:24-30）

3) キリスト教史における事例

➤ 最初期の記録——「キュプリアヌスの疫病」

この疫病は 250 年から 265 年まで続いた。迫害の時代におけるキリスト教の興隆の一因として、疫病に対するキリスト教の対応をあげることができる（スターク 2014、第 4 章）。「迫害に対する神の怒りの故に疫病が起こったという天罰的疫病観は、3 世紀の史料には見られない。むしろ反対にキリスト教の故に神々の怒りが下り、疫病が流行したという見解は異教側に見出される。キリスト教側の天罰説は後代の作り物であって、疫病と同時代のキリスト者にとって疫病の原因は問題にはなっていない。（中略）さらにキュプリアヌスもディオニシオスも共に看病の結果亡くなったキリスト者を殉教者と見なしていた。生命を賭すことを可能にしたのがキリスト教の終末思想であり、この世の生の終りは決して人生の終りではないというものである。（土井 2015、38-39 頁）。

➤ 14 世紀ヨーロッパにおけるペスト

イエスの教えにもかかわらず、後のキリスト教は必ずしも因習的な因果論から自由になることはできなかった。人を裁くための原因探しに熱心であった時代すら存在したが、それは異端裁判や魔女狩り、十字軍に限らない。14 世紀ヨーロッパにおけるペスト流行の時代、その流行に勝るとも劣らぬ勢いで広がっていったのがユダヤ人元凶説であった。ペストを流行させた原因と見なされたユダヤ人たちの処刑を多くのクリスチャンが望み、町によっては、ユダヤ人ゲッターが丸ごと殲滅させられた。そうした人々はキリスト教的正義を実行していると信じて疑わなかったのである（村上 1983、139-147 頁）。自らは正しいことをしていると信じている人によって行われている悪を、どのように受けとめることができるのだろうか。

3. ポストコロナを見据えた神学的な問い

1) 創造論——創造物語が科学の時代に問いかけるもの

➤ 科学的世界観と宗教的世界観の調和（佐々木・小原 2020）（同志社大学 良心学研究センター 2021）

➤ 王の政治神学の換骨奪胎：「神の像」は「王のもの」から「人間のもの」になった。しかし、その理解・解釈の中に残存する過剰な人間中心主義を批判的に対象化していくべきではないか（小原 1998）。

➤ 安息日

日本では、勤勉の美德のゆえに、休むこと（休ませること）への罪悪感はなおも根強く存在している。それゆえに、休むことの積極的意義、さらに言えば、その創造的意義を、聖書が示す安息日の視点から提示することは、今後の社会に対し重要な貢献となるのではないか（小原 2018b、271-280 頁）。

2) 神義論——神なき時代における不条理への対向

➤ カミュ『ペスト』（1947 年）

ペスト拡大に伴って封鎖されたアルジェリアのオランという都市を舞台として、ペスト

終息によって都市が開放されるまでの間の人びとの精神状況や生活を描いた架空の物語である。そこでは、ペスト蔓延という緊急事態において人間の心理や社会関係がどのように変化するのか、経済活動が停止したとき、どのような対応がなされるのか、などが具体的かつ緻密に描かれながら、同時に、この世の不条理や、人の苦難や死に対する普遍的な問いが投げかけられている。

・イエズス会の司祭パヌルーによる最初の礼拝での言葉

皆さん、あなたがたは禍いのなかにいます。皆さん、それは当然の報いなのであります。(カミュ 1969、137 頁)

この説教はある人々に、それまではおぼろげであった観念、すなわち自分たちは何か知らない罪を犯した罰として、想像を絶した監禁状態に服させられているのだという観念を、一層はっきりと感じさせたのである。(同、145-6 頁)

・小説における「筆者」の言葉

世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる。人間は邪悪であるよりもむしろ善良であり、そして真実のところ、そのことは問題ではない。しかし、彼らは多少とも無知であり、そしてそれがすなわち美德あるいは悪徳と呼ばれるところのものなのであって、最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである。殺人者の魂は盲目なのであり、ありうるかぎりの明識なくしては、真の善良さも美しい愛も存在しない。(同、193 頁)

(パヌルーとの会話の中で)

神さえも、今ではわれわれを引き離すことはできないんです。(同、324 頁)

➤ D. ボンヘッフアー (1906-1945)

われわれは——「タトエ神ガイナクトモ」——この世の中で生きなければならない。このことを認識することなしに誠実であることはできない。そしてまさにこのことを、われわれは神の前で認識する！ 神ご自身がわれわれを強いてこの認識に至らせ給う。(ベートゲ 1988、417 頁)

伝統的な神義論では「(全知全能の) 神がいるとすれば」という前提に立って、この世の不条理の形而上学的な説明へと向かう。しかし、カミュとボンヘッフアーが垣間見たのは、「タトエ神ガイナクトモ」誠実な行動へと向かわせる実践の地平である。科学では説明できない不条理や限界状況においてのみ宗教を登場させるべきではない。それでは科学的知見を備えた「成人した世界」(ベートゲ 1988、378 頁)において、宗教の出番は極小化していくしかないだろう。

・新約聖書学者 N. T. ライトも、(神罰や悔い改めではなく) 誠実な実践の神学的意義を語

っている。

このような事態〔小原注：大飢饉のこと、使徒 11:28〕が起こったとき、特別に危険にさらされるのはだれか？ 私たちに何ができるのか？ そしてだれを送ろうか？ これを見て、これは神学的な対応ではない、ただの実用的な対応にすぎないと思う人がいるかもしれません。しかし、この対応は「神学的でない」と対応することこそが、じつは「神学的でない」のです。（ライト 2020、48 頁）

3) 終末論——インターパンデミック時代の終末論

➤ 中間の時代

ポストコロナの時代を迎えたとしても、次のパンデミックが待ち構えている。グローバルな人口移動・人口集中・人口増加・自然破壊が続く限り、パンデミックが途絶えることはない。その意味で私たちはインターパンデミック時代を生き続けなければならない。「中間の時間（時代）」をいかに生きるかは、キリスト教神学、とりわけ終末論にとって重要な問いであり続けてきた。

➤ カタストロフィーへの対応

新型コロナウイルスがもたらした人類規模の危機は、テロや戦争、地球温暖化、原発事故に匹敵する、新たなカタストロフィーを突きつけることになった。カタストロフィーの中では、日常の裂け目から非日常を見たり、日常の中で意識しなかったことを新たに認識することになる。極限状況の中で、いかに冷静に世界を認識し、次の時代につなぐことのできる、新しい物語を紡ぎ出すことができるのか。

➤ 生態学的終末論（eco-eschatology）

地球環境の有限性と持続可能性を考慮することのできる終末論と、それを支えるコスモロジーが必要となる（芦名・小原 2001、第IV部）。

4. まとめ——バーチャル空間の拡大の中で

1) バーチャルの拡大、リアルへの侵食

新型コロナウイルス感染拡大の結果、教育・研究を含む社会のオンライン化が加速した。この変化はとどまることなく、近未来社会の土台を構成していく。

Society 5.0（第 5 期 科学技術基本計画）：サイバー（仮想）空間とフィジカル（現実）空間が高度に融合した未来社会

教育も、こうした変化の影響を受けてきた。

☞ ICT 教育（<http://www.kohara.ac/education/ict.html>）

2) バーチャルとキリスト教

「バーチャル」という概念は、中世の神学者ドゥンス・スコトゥスによって導入された。彼は、物はその属性（特徴）を形式的にはなく、バーチャル（潜在的）に含んでいると主張した。つまり、リアルを、潜在能力であるバーチャルの現れと見なすことで、リアルの本質を省察できるようになると考えたのである。現代においてバーチャルは「仮想的」と訳されることが多いが、語源的には「仮想」以上の実体的・能動的なニュアンスを持っている。また、「見える教会」（現実の教会）と「見えない教会」（「キリストの体」として

の教会) という区別は、リアルとバーチャルの間で展開されるダイナミズムを前提にしている。

イエスは神の国の到来を告知し、神の国を多くのたとえで語った。その際、イエスにおける神の国は、熱心党（リアル志向）やクムラン教団（バーチャル志向）などと異なり、リアルとバーチャルの二者択一的な問いを拒絶する。もっとも小さなもの（野の花、からし種、追いはぎに半殺しにされた者）が、もっとも大きなもの（神、神の国、神の愛）につながっていく逆説のダイナミズムを、キリスト教は近未来社会の中でどのように生かすことができるだろうか。

また、社会のオンライン化と共に、AIによる「最適化」がいつそう進展していく中で（新型出生前診断やヒトゲノム編集のような別種の「最適化」もある）、それに抗うことのできる知的基盤をキリスト教は示すことができるだろうか。

【参考文献】

- 芦名定道・小原克博（2001）『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
- カミュ、アルベール（1969）『ペスト』（宮崎嶺雄訳）新潮文庫。
- 小原克博（1998）『「神の像」に関する一考察——フェミニズムとエコロジーへの応答』、『日本の神学』第37号、33-54頁。<https://doi.org/10.5873/nihonnoshingaku.1998.33>
- 小原克博（2018a）『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』平凡社新書。
- 小原克博（2018b）『ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門』日本実業出版社。
- 小原克博（2020）「パンデミックとキリスト教——神学的諸問題」、『福音と世界』2020年11月号、6-11頁。
- 佐々木閑・小原克博（2020）『宗教は現代人を救えるか——仏教の視点、キリスト教の思考』平凡社新書。
- スターク、ロドニー（2014）『キリスト教とローマ帝国——小さなメシア運動が帝国に広がった理由』（穂田信子訳）新教出版社。
- 土井健司（2015）「「キュプリアヌスの疫病」考——古代キリスト教におけるフィランソロピア論のための予備的考察」、『神学研究』62号、25-39頁。
<http://hdl.handle.net/10236/13777>
- 同志社大学 良心学研究センター編（2021）『良心から科学を考える——パンデミック時代への視座』岩波書店。
- ナンシー、ジャン＝リュック（2021）『あまりに人間的なウイルス——COVID-19の哲学』（伊藤潤一郎訳）勁草書房。
- ベートゲ、エバハルト編（1988）『ボンヘッファー獄中書簡集』（村上伸訳）新教出版社。
- 村上陽一郎（1983）『ペスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊』岩波新書。
- 山極寿一・小原克博（2019）『人類の起源、宗教の誕生——ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』平凡社新書。
- ライト、N. T.（2020）『神とパンデミック——コロナウイルスとその影響についての考察』（鎌野直人訳）あめんどう。